編集後記：明けましておめでとうございます．新しい年を迎え，会員の皆様には，決意も新たに，研究や業務に取り組んでおられることと存じます．今年こそ，日本全体が飛躍する年になることを祈っています．

前回（2008年12月）の編集後記の執筆から約2年が経過し，将来予測が不透明な状況がますます進行し，前回述べたような，いわゆる「正常化の偏見」も及ばない危機的な状況になりつつある，との感を一層深くしています．このような不透明な時代だからこそ，学会の将来像を真剣に考える必要があります．理事会等でも議論をする機会がありますが，なかなか明確な将来像を描けないでいます．

学会の将来像や役割といった重要な課題を検討する場として評議員会があります．総合計画担当理事としてここ数年評議員会を担当してきました．ここ10数年の評議員会の活動を議事録等で振り返ってみますと，学会の社会貢献のあり方，若手研究者への支援，初等中等教育への支援，一般市民への啓発活動，気象学研究のありかた，気象業務との連携，気象予報士との連携等々，多くの重要な課題が議論されてきています．そして，課題のいくつかが実現・実施されてきています．また，今後一層取り組む必要のある課題として，メディアに対する広報活動，初等中等教育における気象教育の充実等があります．これらについても，広報委員会の設置や国際地学オリンピックへの支援等を通じて，少しずつではありますが進展してきています．しかし，学会員の数も長期低落傾向にあり，今後の発展を考えるためにも，一度，原点に立ち返って，専門家集団としての学会の役割を，将来を見据えて，真正面から検討する時期が来ている，と個人的には感じています．

閑話休題，編集後記を書くことは楽しいことの一つです．以前，編集委員長をしておりましたころは，編集実務に関する事項を会員に周知する内容が多かったと記憶しています．久しぶりに編集委員会に復帰して，若い編集委員の書かれる編集後記を読んで，その話題の幅広さに感心しています．

通常，学会機関誌を含む多くの定期刊行物には編集後記の欄があります．私が入っているいくつかの学会の機関誌にも編集後記の欄があり，日本学術会議が刊行している「学術の動向」には編集委員会委員長後記があります．多くの編集後記では，その号を担当した委員の苦労話や，特集のいきさつ等が述べられていることが多いようです．「天気」ではそれ以外に，気象学や気象業務にかかわる多彩な内容が含まれており，毎号，非常に興味深く読んでいます．1986年第33巻以降の編集後記は学会HPで簡単に読むことができます．それ以前は断片的にHPに掲載されており，印刷物ではより多くの編集後記を読むことができます．ユニークな内容の編集後記が多数あり，執筆者の名前を見て，ひと味違った側面を発見することもあります．会員の皆様には，ぜひ時間があれば読んで見られることをお願い致します．このようなことを通じて学会機関誌と会員をつなぐ絆が強固になり，ひいては学会の発展に繋がればと思っています．

（藤谷徳之助）